

Ⅲ 実践編②

平成27年度特別支援学校授業改善プロジェクトの

担当教諭16名の授業実践（授業提示者3名を除く）等を紹介します。

小学部わかば学級 生活単元学習

単元「うどんのわかばⅡ～うどんやさんをひらこう～」

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 教諭 斎藤 明

【単元の要旨・特徴】

本単元では、自分でできることを増やすこと、自分の力を発揮して自分の役割を最後まで果たすこと、見通しをもち工程に沿って友達や教師と一緒に協力して活動に取り組むことをねらいとした。うどんをテーマにした授業を展開し、誰かに食べてもらいたいという児童の声から、うどんやさんの開店に向けて準備をした。準備では、中学部の先輩から具を作ってもらい、高等部陶芸班から箸置きの作り方を教えてもらうなど他学部の協力を得て取り組んだ。附属小学校との交流及び共同学習でうどんやさんを6回開店し、相手にうどんの作り方を教えたり関わったりすることで、満足感や達成感を味わった。



【附属小学校とのうどん交流】

1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☒ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☒ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

・めくり式の工程表、ペアでの活動

2 工夫改善の実際と児童の変容

めくり式の工程表をもとにうどん作りを進めることで、次の活動に移る前に机を一緒に動かしたり、使う物を持ってきたりするなど、友達と一緒に準備や後片付けをすることができた。

関わり合いながらうどん作りができるようにペアで活動したり、みんなで見合ったり、役割分担したりするなど工程によって様々な形態でうどん作りを行った。うどんを切る場面では、相手のタイミングに合わせて「うどんマシーン」に生地を入れるなど、好きなうどんの活動を通して、相手のことを考えて関わるできるようになった。



【めくり式の工程表】



【協力してうどんを切る】

3 今後の課題と改善点

今後は様々な場面での他者と関わる活動を通して、より自分から発信する力を育んだり、相手の発信を受信したり、日常生活に般化できるようなやりとりを取り入れたりするなど、「聞く・話す」ことに重点をおいた内容を展開していきたい。

【単元の要旨・特徴】

友達や教師と一緒に活動する中で、役割が分かり、進んで取り組む力を育てたいと考え、本単元を設定した。児童の好きな絵本の中から「ぐりとぐら」を選び、読み聞かせからごっこ遊び、決められたせりふや動作で表現する劇へと発展させた。出来上がった劇は友達や教師、保護者、交流相手を招待して発表会を開いた。劇で使用する小道具も自分たちで制作し、操作する自分たちも、見てくれる人もわくわくするような仕掛けを作った。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☒ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・児童が主体的に発展させていく指導計画の工夫とそのための教師の支援
- ・「一人でできそう」「やってみたい」という意欲を引き出せるような小道具の工夫

2 工夫改善の実際と児童の変容



児童主体の活動が展開できるように、読み聞かせやごっこ遊びの時間を多くし、十分にストーリーを理解できるようにした。遊びの中で自然に言葉や動きが生まれ、それを劇中のせりふや動作に取り入れた。また、使用する小道具を実物より大きく制作したことで、登場人物になったようなわくわく感が増し、操作にも意欲的だった。「対象物を見る」「手を伸ばす」といった課題に迫るよう、高い位置にリングを付け、引っ張ると小道具の卵が割れる仕掛けなどを作った。操作する本人はもちろん、周囲も期待して注目し、互いに認め合う姿にもつながった。

3 今後の課題と改善点

本時の目標を児童と確認することは定着したが、自己評価は「～ができました」という言葉が多くなる。具体的な評価を教師が分かりやすく伝えたり、タブレット端末等で自分を客観的に確認する機会を設けたりすることで、「次はもっとこうしよう」といった次時につながる評価をしていきたい。

小学部4年 生活単元学習

単元「おいしいねどらやき②～おみせやさんをひらこう」

秋田県立比内養護学校たかのす分校 教諭 舘山 奈穂子

【単元の要旨・特徴】

年間を通して、発展させながら繰り返し活動できるように各単元のテーマを工夫した（自分たちで味わう→身近な先生にプレゼント→小学部の友達にお店開店→保護者にプレゼント）。本単元では、小学部合同のクリスマスパーティーでの「おみせやさん」開店に向け、看板作りやちらし作成などの準備、お店の練習に取り組んだ。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・繰り返しの活動や自分で決めたり選択したりする場面、意見を出し合う機会を設定した。

2 工夫改善の実際と児童の変容

どらやき作りを繰り返し行い、「おみせやさん」の活動に発展させたことで、長い単元であってもお店の開店を楽しみにしながら意欲的に取り組む姿やどらやき作りの技術の向上、相手を意識して作る気持ちの芽生えなどの成果が得られた。



プレゼントしたい相手を選択したり、お店の名前のアイデアを出し合ったりと、自分たちで考えたり決めたりする場面を設定したことで、自分たちのお店という自覚が見られ、制作活動にも意欲的に取り組んだ。

開店当日は、「いらっしゃいませ」と呼び掛けたり、どらやきやジュースをトレイに順番に乗せて席に運んだり自分の役割を果たそうとする姿が見られた。おいしそうに食べてもらい、お礼を言われたことで、一人一人が達成感を感じることができた活動となった。



3 今後の課題と改善点

どらやき作りでは、焼き上がるまでの待ち時間の活用、生地の状態や焼き加減の調整などの工夫が必要である。また、店員として注文を取ったり、呼び掛けをしたりするなど、よりお店らしい形に近付けることで、活動内容を発展させることができると考える。

小学部4年1組 生活単元学習

単元「おみせやさんごっこをしよう」

秋田県立横手養護学校 教諭 森 愛子

【単元の要旨・特徴】

家庭生活で外出や買い物をする機会は少ないが、100円ショップやコンビニエンスストアで売っている物など、お店へのおおよそのイメージをもっている。ほとんどの児童が、自分でお金を払う経験をこれまで実際にしたことはないが、店員と客の立場をそれぞれ遊びながら経験し、相手に品物を手渡したり、「ください」「ありがとうございました」などのやりとりをしたりすることで、少しずつ買い物の簡単なルールを学んでほしいと考えた。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	■子ども理解 □単元設定 □教材研究 □指導計画・内容
授業実践	□教師の基本姿勢 □学習のねらい ■学習活動の設定 □環境の設定 □教材・教具 □説明・教示 □評価

・「おみせやさんごっこ」は友達や教師と関わりながら、「商品作り」は小集団または個々にじっくりと取り組むことができるように活動場所や内容を設定した。

2 工夫改善の実際と児童の変容

商品は、児童と相談して決めた。自立活動で指先でつまむ学習をしている児童は、シール貼や洗濯ばさみで紙をはさむなど、それぞれの学習課題を担任間で確認し合い、商品に生かせるように準備した。一人で完成できるように支援を変えたり、少し難易度を上げた商品作りをしたりするなど、教材・教具の工夫改善を図った。

児童同士のやりとりからトラブルになり学習体制が崩れることが多く、関わり合う学習活動を避けていたが、お店屋さんのやりとりや、商品を紹介し合う場面を設けたことで、相手の活動を認めたり、順番を守ったりすることができるようになってきた。

「〇〇君お客さんになって」「次はビーズの飾りを作りたい」などやりたいことを発言し、意欲的に活動する姿が見られるようになってきた。

3 今後の課題と改善点

実際の生活場面に反映できるよう買い物を目的とする校外学習の計画を立てた。しかし、冬季の道路事情や体調を崩しやすい児童が多い学級であることから、安全面を優先し、校外学習を中止した。季節や道路事情、学校行事等も踏まえて年間の単元を計画し、よい時期に校外学習を実施したい。また、今後も家庭と連携を図り、買い物に出かけた際はレジで支払う経験を重ねられるよう協力を依頼していきたい。

【単元の要旨・特徴】

肢体不自由を併せ有する児童を含む、多様な実態の児童が共通で取り組むことができる粘土を教材とし、年間を通して3回取り組んだ。粘土で作った作品を用いて作品展を開いたり、身近な教師にプレゼントをしたりした。また、学習を進展させ、他の行事や学習でお世話になった地域の施設にもプレゼントをした。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☒ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・児童に応じた活動の設定（使用する粘土、制作する物）
- ・児童同士が関わり合う場面設定や教師の言葉掛けの精選

2 工夫改善の実際と児童の変容

鉛筆立てやメモスタンドなど、児童が得意な手指の動きを生かせる制作物を複数設定した。児童や制作物に合わせて粘土の種類を変え、児童によっては粘土に徐々に水を加えて柔らかくするなど、感触にも配慮した。手指にベトベトまとわりつく感触が苦手だった児童が、活動を繰り返す中で粘土の感触に慣れ、自分から手を伸ばして粘土に触れたり、手指に力を入れて握ったりするようになった。また、児童が扱いやすい粘土や興味のある形の型を使用することで、制作活動に意欲的に取り組んだ。



児童が自分から友達と関わったり、友達のいいところを認め合ったりできるように、グルーピングや配置、関わる場面の設定、教師の言葉掛けに配慮した。言葉を発しない児童も、教師や友達の呼び掛けに視線を合わせて応えたり、笑顔になったりするなど反応が豊かになった。また、活動する中でお互いの作品を見合うようにした。友達からのアドバイスを受けて手直しするなど、よりよい作品を作ろうとする姿が見られた。



3 今後の課題と改善点

この授業で得た関わり方や語り、授業への参加意欲、手指の使い方などを他の学習活動や家庭での生活などへつなげていく工夫が必要である。

【単元の要旨・特徴】

修学旅行や校外学習で見聞きしたこと、体験したことを、他学年の友達に発表する活動を中心とし、年間を通して4回行った単元である。自分の役割に進んで向かい最後までやり遂げる力、友達とやりとりしながら一緒に活動する力を育むために、校外学習の行き先や発表する相手を替え、内容を発展させながら行った。本単元では、これまでの思い出をクイズにしたり、プレゼントを作ったりして、家族や小学部の友達に、卒業に向けて感謝の思いを伝える発表会を行った。



【発表会の様子】

1 授業の工夫・改善点

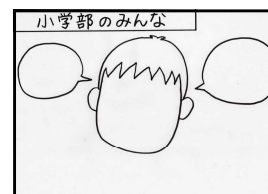
授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☒ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・目標をみんなで共有できるような活動と教材を準備した。
- ・前単元までの発表の経験を生かして、自分たちで（友達と一緒に）発表を進められるように、役割を3人ずつのグループで進める方法を取り入れた。

2 工夫改善の実際と児童の変容

児童が単元の目標達成への意欲を高められるように、発表会に招待する相手にどのような表情や気持ちになってほしいかを、図1のボードを基に考える場面を設けた。児童からは図2のような意見が出た。自分たちで目標を考えることで、「そのために大きな声で話す」など、頑張るポイントに自ら気を付けて発表する姿が多くあった。発表会では、招待した友達や家族の表情、言葉に喜び、達成感を味わう様子が多く見られた。

発表を3人ずつのグループで行った。繰り返しの中で徐々に教師の支援を減らすことで、互いに声を掛け合いながらクイズの準備をしたり、順番に又は声を合わせてクイズを出したりする姿が増えた。



【図1 目標ボード】



【図2 児童の意見】

3 今後の課題と改善点

児童が達成感とともに「もっと～するといい、～してみたい」など、次への挑戦につながる課題について感じたり考えたりすることができるように、振り返りの仕方を工夫する必要があった。児童同士の評価場面の設定やICTの活用を行っていきたい。

【単元の要旨・特徴】

職業生活や地域生活に関する内容を取り上げ、見学を通して身近な社会への関心を高める機会をつくりたいと考え、大曲駅と大曲郵便局の見学を行った。活動は、①駅と郵便局の仕事調べ、②見学時の日程と役割分担、③見学場面を想定した学習、④大曲駅と大曲郵便局の見学、⑤まとめ、の流れで行った。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

○実際の学習場面の設定と繰り返しの実践

- ・生徒のよさを生かした係活動の設定
- ・見学場面を想定した事前学習の実施と本時のポイントの提示（姿勢、話し方等）

2 工夫改善の実際と生徒の変容

見学時に自信をもって係活動（質問係、記録係、デジカメ係等）に臨むことができるように、各係の内容を理解できる実際の学習場面を事前に設定した。質問係は適切な質問内容の選択と話し方を、記録係はメモの取り方を、デジカメ係はカメラの取扱い方法等を学習した。

教師を見学先の方に見立て、見学場面を想定した学習を繰り返して行った。質問係は大きな声ではっきりと話すことができるようになった。記録係はバインダーを用いて用紙に記入することを練習し、ポイントを押さえて書くことができるようになった。デジカメ係はデジタルカメラの扱い方や撮影の仕方を覚えることができた。見学当日はそれぞれの係に自信をもって臨み、役割を果たしたという達成感と安堵感の表情が見られた。

3 今後の課題・改善点

今後は、生徒たちが「調べてみたい」という意欲を一層高め、「なぜだろう」と課題意識をもてるような工夫が必要である。また、生徒たちで気づき、声を掛け合い、自分たちの力で課題解決していけるような場面設定や手立てを講じていきたい。さらに、まとめでは掲示物を作成するだけではなく、発表機会を設定することで、学んだことをより実感できるようにしていきたい。

中学部1年 生活単元学習

単元「VS中1 ～新しいゲームをプロデュース！～」

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 教諭 相原 淳

【単元の要旨・特徴】

「VS中1」は、テレビ番組「VS嵐」からヒントを得て「おもしろ」「楽しそう」「やってみたい」という生徒の興味・関心を基に、やってみたいゲームを考える、ゲームに必要な道具を制作する、ゲストを招いて対戦（交流会）をする、の流れで単元構成をした。10月に新ゲーム「パイレーツ・オブ・コロコロ」を完成させ、様々な人（他学部の児童生徒、保護者、地域の保育園児）を招待して交流会を行った。



【パイレーツ・オブ・コロコロの活動】

1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☒ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☒ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

・振り返り活動（相互評価）の充実

2 工夫改善の実際と生徒の変容

○タブレット端末の活用

タブレット端末（動画）を使い、活動を振り返る場面を設定した。動画で振り返ることで活動中には気付かなかった仲間のよさや頑張りに気づき、認めたり具体的に伝え合ったりすることができた。これにより仲間（他者）に認められ、達成感を高めることができた。

○伝え方のモデルの提示（まほうの言葉「こうすればもっとよくなるよ！」）

相手を認め、相手のことを考えて伝えるモデルを示すことによって、言われた側も改善点やアドバイスを肯定的に受け止め、今後に生かそうとする姿が増えてきた。

○ワークシートの活用

学習における個人の目標が焦点化された。また、目標を導入場面で確認したり、発表したりすることで仲間の目標を知り、振り返りの場面では、「〇〇さんのここがよかった」「〇〇さん、目標達成だね」など、具体的に伝え合うことができた。

3 今後の課題と改善点

今後は、授業のまとめでの相互評価の充実に加え、導入での前時の振り返り、展開での相互評価や教師による即時評価を含め、生徒の達成感につながる評価の在り方等について検討、改善をしながら授業づくりに取り組んでいきたい。

中学部 1・2 年 1 組 生活単元学習

単元「かがやきカフェⅢ～国際教養大学の留学生を招待～」

秋田県立秋田きらり支援学校 教諭 高橋 浩樹

【単元の要旨・特徴】

本単元は、生活経験や主体的に取り組むことが限定的になりがちな肢体不自由のある生徒たちが、カフェの活動を通して、自分たちで考えて接客や飲み物を用意するなどの役割や責任を果たしながら取り組む単元である。年間を通して 4 回開店し、開店のたびに招待する相手を変えたり、提供する飲み物を少しずつ変えたりし、学習課題をステップアップして行った。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☒ 説明・教示 ☐ 評価

- ・より積極的な姿を目指すために、生徒の役割を変更した。
- ・活動に見通しをもてるような情報の整理と、発問の精選を行った。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

3 回目の開店を目指す本単元では、より目的意識をもつことと、自分の役割は何かを考えられるように、これまで固定していた生徒の役割を変更した。これにより、自分が以前行っていた役割の内容を友達に教えたり、「～さんはこうしていた」と考えたりしながら、自分の役割に積極的に取り組んだりする姿が見られた。

また、教師の支援では、情報を整理した板書計画や発問のタイミングなど毎時間改善を図った。生徒たちは教師にすぐにたずねることなく、提示している情報を手がかりに行動を考えてから活動することが多くなった。



3 今後の課題と改善点

開店までの流れを小単元の中で繰り返し行う場面を意図的に設けたことで、ある程度決まった事については、経験を基に予測して活動できたが、お客さんが飲み物をこぼしたなど予想外の場面には対応できないなどの課題が見られた。新たな課題は、個別の指導計画を見直して、学習活動の設定などへ反映していきたい。

中学部 1・2 年 1 組 生活単元学習

単元「卒業を祝う会を開こう～卒業生に感謝の気持ちを伝えよう～」

秋田県立大曲養護学校せんぼく分教室 教諭 若生 友樹

【単元の要旨・特徴】

これまで、「分教室まつり」や「おもてなしふれあい展」などの活動では、中学部 3 年生が中心となり、地域の人々や家族に感謝の気持ちを伝える学習を行ってきた。本単元では、卒業を祝う会の計画や準備を自分たちで行う難しさや喜びを体験することで、活動への充実感や満足感を得られるのではないかと考え、本単元を設定した。本単元は、卒業を祝い、卒業生に感謝の気
【いもきんとん作り】
持ちを伝える会である。また、本学級が中心となって会を計画するのは初めての経験である。内容は、生徒が話し合っ決定し、生徒が主体となって会の準備・進行を行う。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☒ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・一人一人が主体的に考えて、判断し、表現したり、活動したりする場面の設定。
- ・生徒の気持ちや思考に寄り添い、一緒に取り組む。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

生徒の主体性を引き出すために、卒業を祝う会の計画と進行を生徒に委ね、生徒の思いや願いを引き出す支援を行った。卒業を祝う会の計画を生徒に委ねたことで、活動にやりがいを感じ、話し合いが活発となり、「おもてなしふれあい展で卒業生と一緒に作った思い出のいもきんとんを自分たちの手から食べさせてあげたい」「歌やコントをビデオに撮って感謝の気持ちを伝えたい」など、ユーモアある意見が出された。ビデオメッセージ作りでは、完成したビデオを視聴した後に「感動してくれると思う」などの感想が述べられ、大きな達成感や満足感を得ることができた。また、卒業を祝う会の中でも自分たちが考えた企画を卒業生に喜んでもらったことが活動への自信となり、「また会を開きたい」「またみんなに喜んでもらいたい」などの思いをもち、次の活動への期待感が増し、意欲が向上した。

3 今後の課題・改善点

今回の授業づくりを生かし、一層生徒が主体となり、楽しさや喜び、達成感や満足感の得られる授業づくりを目指す。また、本単元で身に付けた力や意欲を次の単元や来年度の指導計画につなげるために、「ミニマムスタンダード」を活用して作成していく。

中学部 1～3年 生活単元学習

単元「和光園にここプロジェクト②

～和光園のみなさんによろこんでもらおう！プレゼントをつくろう！～

秋田県立比内養護学校かづの分校 教諭 廣川 佳世

【単元の要旨・特徴】

これまで交流を続けてきた学校近くの老人福祉施設「和光園」の職員の方から雑巾作りの依頼を受けた。その際、届ける時期に合わせてクリスマスリースも作ってプレゼントしたいと生徒たちから声が上がった。訪問時に直接顔を合わせ、やりとりしたことで、生徒たちは自分たちの活動が感謝されたことをより実感し、充実感につながった。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☒ 環境設定 ☒ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

・自分たちで活動できる教材・教具や役割分担の工夫と、相手に喜んでもらうために生徒が気づき考える工夫

2 工夫改善の実際と生徒の変容

リースの部品となるフェルトボールを作る際に、フェルトボールの良品と不良品を掲示したことで、生徒たち自身が作品の出来映えを確認しながら作り続けることができた。また、個々の実態に合わせて道具を改善し、使いやすい物を選べるようにした。さらに、グループ活動にリーダーを設定したところ、生徒同士で進めたり、リーダーを中心に助け合いながら進めたりすることができ、生徒同士の関わりが増えた。生徒の提案によるクリスマスリース作りであったことから、目標の個数と期限を目指し集中して取り組むことができた。



3 今後の課題と改善点

作業スペースとしての机上が、どこに何を置いたらよいか分かりにくい状況であったことから、視覚的に分かりやすい工夫が必要である。なお、視覚的な支援については多くなりすぎないように、生徒一人一人の成長に合わせた支援となるよう、短いスパンで評価をしていきたい。

【単元の要旨・特徴】

本学年は全盲の女子生徒1名であり、視覚以外の感覚を活用して学習している。本単元では、生徒の好きな活動の一つである調理を通して素材と関わり、調理したものを身近な友達や教師に販売することで、人との関わり方を学ぶことができると考え、「ニョッキ屋さん」を設定した。自分から調理に必要な物や手順を確認できるように、学習の始まりには、料理のレシピを歌詞にしたテーマ曲を歌い、歌を覚えるようにした。また、様々な手の動きを身に付けられるように、材料に直接触れて調理した。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・生徒の自発的な発言や行動が出るように、調理の一連の活動を繰り返し設定する。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

生徒が育てて収穫したジャガイモを主な材料として使うことで、素材に親しみをもち、感触を楽しみながら調理を行うことができると考えた。また、材料を粘土と同じ柔らかさにすることで、「混ぜる」だけではなく「丸める」「伸ばす」という手の動きの獲得も目指した。



初めは、「ニョッキ」と聞いても、生徒はあまり関心をもっていなかったが、繰り返し調理して試食することで料理の楽しさやおいしさを知り、ニョッキを作る日を心待ちにするようになった。また、調理の材料や手順が歌詞になっているテーマ曲「ニョッキ屋さんの歌」も覚え、ニョッキ作りの手順をほぼ一人で話し、行うことができるようになった。ニョッキ作りでは、生地を混ぜるだけでなく、両手を使って伸ばすことも担当し、手の平を使って伸ばそうとする姿が見られるようになった。

3 今後の課題と改善点

昨年度の販売活動に比べて、長時間の接客ができるようになってきており、人との関わりの中で成長が見られた。今後は、他学年の生徒と一緒に販売活動ができるか検討し、仲間と協力する場面も作りながら、これまで学習してきたことを発展させていきたい。

【単元の要旨・特徴】＊附属特別支援学校での実践

他者との関わりに苦手意識をもっている生徒たち。恥ずかしさや苦手意識から、相手が不快に感じるような発言や態度をとってしまうことも少なくない。本単元では地域の老人施設や保育園等を訪れ、ゲーム、折り紙、絵本の読み聞かせなどを一緒に行いながら、相手に伝わる話し方を意識したり相手の気持ちを考えたりしながら活動することを主眼とした。相手に喜んでもらったり感謝されたりする経験を重ねることで、自分を表現することに自信をもち、前向きな気持ちで他者と関わることに繋がると考えた。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☒ 子ども理解 ☒ 単元設定 ☐ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☒ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☒ 説明・教示 ☐ 評価

- ・子どもの実態を踏まえたねらいの設定
- ・気付きや思考、イメージ化を促す働き掛け

2 工夫改善の実際と生徒の変容

老人施設では、高齢者とペアになってトランプゲームを行った。ペアになった相手にどのように接すればよいか分からず、否定的な言葉を発したり自分一人でゲームを進めてしまったりする様子が見られた。相手に話し掛ける時の言葉や簡単なルールを場面に応じて具体的に示すことで関われるようになるのではないかと考えた。次の施設訪問に向けて、学級でロールプレイをしながら、話し掛ける言葉や関わり方などを決めてゲームを行った。ゲームをする中で、自分はどの振る舞えばよいか分かり、高齢者との関わりに苦手意識をもっていた生徒も、相手の肩をたたいて教えるなどして自然な姿で関れるようになった。また、関わる際に気持ちに余裕ができたことで、高齢者がうなずいたり指をさしたりする発信を受け止められるようになった。

3 今後の課題と改善点

生徒が人と関わる際のどの部分にどのような苦手意識をもっているのかについて把握することの難しさを感じた。生徒の実態に応じた小さなステップを踏んだねらいの設定とそのための評価が大切であることを感じた。エピソード記録を日常的に評価のツールとして用いる際の効果的な方法について探っていくことが今後の課題となる。

【単元の要旨・特徴】

本単元は、中学部祭りで保護者や地域の方を招待し、屋台でおもてなしする取組であり、そのための調理や制作、調理の評価の活動で構成した。生徒が「祭り」「おもてなし」「自分たちでできること」をポイントに意見を出し合い、たこ焼き屋台を行うことに決めた。調理や接客などを通して、自分たちで活動を工夫して進めたり、マナーを考えながら積極的に人と関わる力が高まったりすると考え、本単元を設定した。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・ 調理の内容や具材など提示したポイントを基に、生徒が意見を出して決定する。
- ・ 調理方法や屋台の小物など必要なものをインターネットや本などを使い、自分たちで調べる。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

生徒主体で活動を決めたり、進めたりしたことで、普段は自分の意見を人前で話すことが苦手な生徒も自分から意見やアイデアを出したり、調理の中で友達にアドバイスをしたりして積極的に活動できた。また、自分たちで調べたことを基にして、生徒同士で言葉を掛け合ったり、交流会の場面で地域の人に教えたりしながら準備や調理を進めることができた。



3 今後の課題と改善点

生徒同士でやりとりしながら活動を進められるように、言葉の他に発声やサインなど個に応じた方法での表現方法を高めていく。また、学級だけでなく、他の学年や他学部と一緒に活動する際にも自分から意見を出したり、仲間と関わり合ったりしながら活動に取り組めるように活動を広げていく。さらに、学習の中で得た調理の技術や手順などを家庭での生活につなげていく工夫をする。

中学部3年 生活単元学習

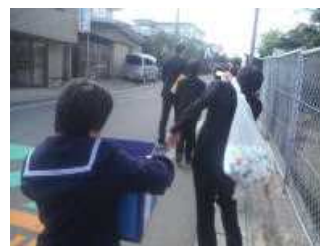
単元「エコキャップ大作戦パート2～エコキャップアートを届けよう～」

秋田県立栗田養護学校 教諭 中野 貴洋

【単元の要旨・特徴】

エコキャップ大作戦は、発展途上国へワクチンを送る支援をしたり、エコキャップを使った制作活動をしたりする学習として、年3回設定した単元である。発展途上国の人の役に立ったり、環境保護につながったりすることに気付き、人の役に立つ経験を積み重ねられる。また、回収活動を通して地域の方との関わり方を学ぶ機会になると考えた。

本単元は、回収協力先の学校にエコキャップアートを作って感謝の気持ちを表したいという、生徒の意見を取り入れた実践である。



【エコキャップの回収】

1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☒ 指導計画・内容
授業実践	☒ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☐ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・生徒同士の話し合いで出た意見を取り入れて、単元構成を再構築しながら進める。
- ・生徒の役割分担を明確にしたり、生徒の発信や動きに対して受容的な態度で接したりしながら指導する。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

生徒のエコキャップアートを作りたいという意見を取り入れたことで活動に対して意欲的になった。また、仕上がりが見えて分かる活動のため、リーダー格の生徒を中心に、休み時間も友達同士で誘い合ってアートを制作した。ある生徒は、キャップの色と数を正確にそろえることが得意な友達に気付き、キャップの準備を依頼し、その友達は正確にそろえて手渡す等お互いを認め合い、活動を進める姿が見られた。



【エコキャップアート制作】

3 今後の課題と改善点

生徒たちが頑張っている場面（活動への取組状況、友達との関わり、発言など）を教師が即時評価し、友達のよさを認める、いろいろな意見があることを知る場面を設定する。また、安心感をもって自分から活動を進めていくよう、生徒の意見を大切にしながら助言する、見守る等の教師の働き掛けを工夫する。さらに、意欲や期待感を高められるよう、本物と触れ合う機会や交流相手等に発表する場面を設定する。

【単元の要旨・特徴】

生徒同士が関わり合ったり協力したりしながら一緒に活動する楽しさを味わえるように、「力を合わせて」というキーワードを掲げ、年間を通して取り組む単元を設定した。

本単元では生徒がより主体的に考えたり活動したりできるように、修学旅行で体験して楽しんだこと（ディズニーランドのアトラクション）を学習活動に取り入れた。また、学習活動に見通しをもち責任をもって取り組めるように、繰り返し体験したり他学年の友達を招待したりする機会を設定した。



1 授業の工夫・改善点

授業デザイン	☐ 子ども理解 ☐ 単元設定 ☐ 教材研究 ☐ 指導計画・内容
授業実践	☐ 教師の基本姿勢 ☐ 学習のねらい ☒ 学習活動の設定 ☐ 環境設定 ☐ 教材・教具 ☐ 説明・教示 ☐ 評価

- ・修学旅行で味わった楽しさやわくわく感を生かして主体的に学習に取り組めるように、修学旅行の学習を通して学んだことや体験したことを学習活動に取り入れた。

2 工夫改善の実際と生徒の変容

生徒が活動内容を考える際に具体的なイメージをもてるように、修学旅行で撮った写真や関係のある映像等、視覚的支援を活用した。それにより生徒が活動に見通しをもち、制作したい物や必要な役割について積極的に意見を述べる事ができた。



生徒が関わり合って取り組むことができるように、その都度関わり方の手本を示すとともに、関わり合う場面や少人数でのグループ活動を意図的に設定した。これにより係を交代する場面で自分から友達にお願いしたり、それぞれの係の準備ができたかどうかを声を掛け合って確認し、声を合わせてカウントダウンをしたり等、生徒同士で関わりながら取り組む姿が増えた。

3 今後の課題と改善点

今後は、一人で解決することが難しい課題に友達と挑戦したり、友達の考えや意見を聞いて自分の考えを深めたりするなど、必然的に友達と関わる場面を設定し、学習内容が段階的に発展できるような単元構成をしていきたい。

生活単元学習の基礎・基本に基づく実践の推進において
中心的役割を担うことを意識し、校内で取り組んだ内容

1 資料の回覧、配付、紹介、活用

- ・ 資料の回覧（学部職員へ）
- ・ 資料の配付（公開研究会の授業者へ）
- ・ 資料の要点をまとめて配付（全校職員へ）
- ・ 授業研究会で資料を紹介し、活用
- ・ 学部研究会で年間指導計画や日々の授業の評価・改善の観点として活用

2 学習会等の実施、定期的な情報発信

- ・ 情報交換会を実施（今年度の取組を互いに紹介）
- ・ 資料に基づく伝達講習の実施（全校職員）
- ・ 生活単元学習の学習会実施
（全校職員：生活単元学習の基礎・基本と年間指導計画の見直し）
- ・ 学習環境づくりの研修会を学部で実施
（各学年の教室を授業時と同じにし、情報交換）
- ・ 各自の実践や教材・教具を学部輪番により情報発信（毎月職員会議後）

3 授業研究会での授業提示

- ・ 公開研究会等で複数回の授業提示
- ・ 授業提示の機会を自主的・計画的に設定（年3回）
- ・ 事前検討と事後検討も実施
（学習指導案検討、事前授業検討、ビデオ視聴による課題検討等）

4 若年教員への助言、学びを生かした発言

- ・ 初任者への助言（年間指導計画や学習指導案の作成）
- ・ 採用3年目の教員への助言
- ・ 生活単元学習の基礎・基本を踏まえた分かりやすい発言、代案の提案
（学部研究会、授業研究会、学習指導案検討会、模擬授業、日々の実践）

【各担当教諭へのアンケートより抜粋】